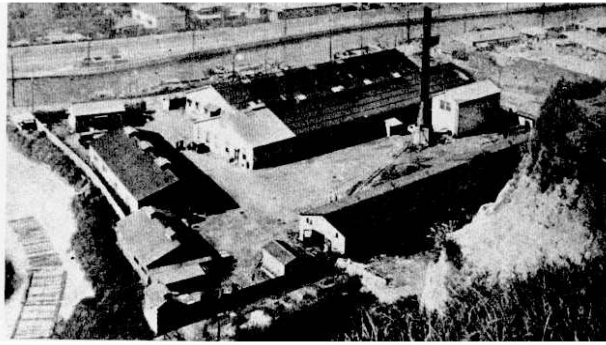




初代社長 ベン・ガードナー



横浜市中村町の旧フォード工場跡でレコードプレスを開始した

今年も「V9.13 おーい元気かい」は盛況のうちに無事終了しました。この集いは、2013年に元寿会会長高橋廣さんが、かつてのビクターの創立記念日を偲んで「なつかしき V9.13 に集う会」として始めたものでありました。私達は「V9.13」を御題目を唱えるように言っていますが、創業時のビクターをもっと深くを知り、ビクターのルーツを知っておくべきと考えております。

以下のお話は、私は昭和36年入社であり、その当時の事を知る由もありませんが、私が経理部機関誌の編集責任者をしていた時代に、創業時の特集を組むことになり、当時のお話を創業時、勤務しておられた経理の大先輩である「斎田庫之助さん（元常務・監査役）」、「森国穂さん（元取締役・監査役）」に日本橋本社においでいただき、当時のお話をテープに収めた中からの抜粋であります。

当時の世相は4年前の関東大震災で横浜も大災害を被り、金融恐慌が吹き荒れて、“大学は出たけれど”が流行語となっていた時代でありました。しかし、この年には上野―浅草の地下鉄が開通したり、甲子園の野球放送が開始されたり、芥川龍之介が自殺した年でもありました。また、この年には浜松高専におられた高柳健次郎先生が走査線40本のテレビを開発していました。当時の大卒初任給は60～70円位でありました。物価の換算は3000倍くらいに相当しますのでいまの20万円くらいになります。SPレコード一枚1円50銭であった。今にすると5千位になります。

当時、アメリカの「ビクタートーキングマシン社」は日本にレコード、蓄音機を輸出、販売をしていたが、復興途中の政府はレコード、蓄音機は贅沢品として、輸入に対し、現在のトランプ大統領の15%や25%どころではない「100%」の関税を賦していました。これではとても商売が出来ないと考え、日本に子会社を創り製造・販売することにした。

この時に、日本ビクターの前身である「日本ビクター蓄音機株式会社」が創設されたのであります。1927年（昭和2年）9月13日の事であります。資本金は200万円（今のお金で60億円）、全額がアメリカの「ビクタートーキングマシーン社」の出資によるもので、初代の社長は「ベン・ガードナー」でありました。

初代のガードナー社長は日本着任後、直ちに工場の選定に入り、廃工場となっていた中村橋の旧フォード組立工場に目をつけた。この工場は当時、米国ビクターの輸入総代理店であった「セール・フレザー社」が持っていたのがきっかけでした。交渉の結果、同工場を借りる事に成功、操業準備に入りました。これが中村町工場として日本ビクター最初の生産工場となりました。昭和3年の最初のプレスレコードは藤原義江の「荒城の月」、「出船」、「出船の港」でありました。

昭和4年に米国ビクターはRCAに合併され「RCA ビクター」ととなりました。これを機会に100%外資であったものが三菱、住友の両財閥が資本参加して日米の合弁会社として再発足しました。そして昭和5年に横浜市新子安に総工費350万円（今のお金で100億円）を投じて東洋一の新工場を建設しました。ここにレコード

と蓄音機の大量生産が始まりました。

初代のガードナーは非常に優しい人であり、仕事のひとすじの人でしたが、部下の結婚式や誕生日にはプレゼントをあげ、当時では珍しい車で通勤していましたが、途中従業員を見つけると乗せれるだけ乗せて毎日出勤しておりました。アメリカ人ながら、ご自身は、休日も返上して精力的に仕事をしました。そのため、工場はいつも活気がみなぎり、フロンティア精神がみなぎっていたという。

当時の会社は、社長を初め部長、課長クラスは全て外人でありました。係長クラスから日本人でありました。当然ながら、通訳がいて。怒られてもジェスチャーで分かるが、詳細は通訳を通してワテンボずれて怒られていました。斎田さんはアメリカの大学を出た人なので重宝された。また、森さんも英語が堪能な方であったので採用されました。会議も決算書類も全て英語でありました。

ガードナー社長は「学歴よりも実力主義」の方針で、間接部門は月給制でタイムカードは在りませんでした。現場は時間給であり、30銭（今では1,000円）、高い人は50銭（1,650円）、中でも成績の良い上井さん（戦後生産部長）などは時給1円50銭まで行ったため、（今では自給4,900円）、あまり高いので月給制に換えられた人も出ました。なかでも良かったのはレコードプレスマンで、歩合制ピースレイトであったため、大卒が70円くらいのときに、倍以上の月150円以上を貰い、腕の良い人は部長以上の賃金を貰っていた。横浜で遊ぶとレコードのプレスマンであるということだけで、どこでもツケもOKで大変にもてたとの事であります。

中村工場従業員は500人位で、女性は全社で50人位であった言われています。もちろん組合も無く、業績が上がると年2回も昇給したこともありました。ビクターは外資系として給料も良く、採用も学校のトップクラスの女子が入社していた。賃金は仕事と同じなら男女同一賃金でありました。事務系も製造の女子も着替えると、皆、ドレスアップして何処かの令嬢スタイルをしていたという。事務部門はタイムレコーダーがありませんでしたが遅刻する人はいなかったとのこと。現場はタイムレコーダーで残業はほとんどありませんでしたが、残業する時は上司のサインが必要でありました。事務部門は終業ベルになると10内に帰らなければならず、書類は金庫や、キャビネットに入れ、机の上はまっさらにして帰りました。机上に残っているものは、掃除夫が全て捨ててしまいました。

外資系会社だけあって給料は良く、残業も無く、夏休み休みは2週間から3週間、強制的に交代で取られました。これにはこの間、代行をして貰う人に仕事を覚えさせることにより、万が一何かあっても代行が出来る仕組みをつくっていた。また引継ぎにより、ごまかしや業者癒着、不正防止の狙いもあったようです。

人の採用には人事部は無く、現在のように人事で一括採用し、配属するのではなく、各部門長、支店長は本社承認を得れば、自部門の戦力になる人を自由に採っていました。採用に当たっては今のようない「身元保証人制度」などの連帯保証人の必要はなく、アメリカ式に採用時に個別に「信用保険会社」と契約し、問題を起すとその保険会社から損害金を受け取る仕組みでしたが、この制度は利用されることはありませんでした。ですから、現在のように配属されて仕事が合わないと言って辞める人はおりませんでした。

ガードナー社長は優しい人でしたが固い信念を持っていました。そのひとつは「正義と奉仕を基調とする大家族主義こそ、企業発展の根源である」というものであり、いつもファミリーという言葉がよく使っていました。これはまさしく野村社長の「大和一致」の精神と共通するものであり、この精神は創業時に既にあったものと考えられる。仕事には厳しいが、儲かると全員にお菓子を配ったり、結婚式に招待されると時計などの高級品も贈っていました。仕事を離れるとアットホーム的で社員はファミリーという考え方を持っていました。

また、ガードナー社長が常に言葉にしていたのは“全てにおいて超一流になれ”というの方針であり、仕事の面でも、待遇の面でも一流を目指し、“ビクターの品位”を大切にしていました。この時期にセールスマンが出張すると、一流の旅館、ホテルに泊まらせ、安いキッチン宿に泊まることを厳禁して、商品イメージを損なうことを嫌っていました。当時のビクター社員は常に誇りとプライドをもって仕事することを心がけていました。

当時、ビクター社員であれば、伊勢佐木町や馬車道ではツケがきいた良い時代であったようです。